

第二百七十四話 座布団なきインパール作戦！

大東亜戦争を語るとき、忘れてならないのが、「インパール作戦」（1944/3/8～7/3）であり、日本陸軍史上最悪の作戦と評される。一方、開戦劈頭のマレー作戦（194/12/8～5/18）は、「日本版電撃戦」（155話参照）と言われ、一方は兵站無視の作戦、他方は作戦と兵站の吻合よろしきもあって成功と評価される。同じ日本陸軍が何故に両極端な作戦を為したのか、一人軍司令官のみの責に帰せられるのであろうか？

1 インパール作戦失敗の因

制空権の喪失、輸送力の低下、稚拙な情報収集、合理性を欠いた作戦指導、軍司令部と師団司令部間の意思疎通の機能不全（結果的に師団長の抗命・三人の師団長更迭事案）、牟田口軍司令官の暴走とそれを制止し得ない方面軍、大本営等のマネージメント欠如、兵站無視等々と様々に指摘されている。その何れにも頷ける点が多々ある。

「兵站軽視の日本陸軍の悪弊」が出たとされる本作戦であり、その端的な例として、・ジンギスカン作戦（牛による運搬、屠殺して食料に）・僅か三週間の糧秣携行・食料の現地調達 等が史家から指摘されている。



2 兵站到係る15軍司令部の幕僚の苦悩と上級司令部の措置

軍司令部の兵站幕僚は、兵站の困難性をよく承知しており、所要輸送力を56万トンキロ程度と見積っていた。当時の第15軍は自動車輜重23個中隊、駄馬輜重12個中隊の輜重戦力を持っており、その輸送力は損耗や稼働率の低下を考慮しなかった場合、

57,000 トンキロ程度であった。

LOC（後方連絡線）としては、泰緬鉄道を含め数本あるが、道路荒廃、自動車道としての要件欠如もあり、雨季の移動困難との問題点を孕んでいた。利用可能な道路を活用して推進補給するためには、兵站部隊の増強が必要であり、当然所要の部隊の配属を要求した。軍司令部の要求部隊と要求数、内示部隊数、発令増援部隊数は次の通りであると云う。（以下の数値データは「太平洋戦争のロジスティックス」（林譲治著 学研）による。）自動車中隊150→26→18、輜重兵中隊60→14→12、輸送司令部3～5→2→1、兵站地区隊4→1→0、兵站病院3～10→3→0、兵站衛生隊4→1→0、野戦道路隊4～5→2→2、独立工兵連隊5→2→0

完成したばかりの泰緬鉄道の輸送力も期待値の1割であった。

作戦に可能性という基盤を与えるのが兵站であり、その基盤を付与するのは上級司令部の最も重要な責務である。所謂「座布団を敷く」のが上級司令部の責任なのだ。

そういう意味において、作戦を認可したのであれば、しっかりと座布団を敷いてやるのが方面軍や南方軍の責任、（当然大本営もだが・）だった筈だ。

3 問題点の所在

南方軍（ビルマ方面軍）が要求に応えなかったのは、牟田口司令官の暴走を止めるためだったとの見方もあるが、事実とすれば何とも姑息に過ぎる。そうではなく、現実問題として要求を満たすだけの兵站部隊を持ち得なかったのだろう。無い袖は振れなかった？であるならば、毅然として中止させれば良いではないか？日本の情緒の問題か、強烈すぎる個人への遠慮があったのか、積極・強硬路線が罷り通り、全体が引き摺られる日本型組織等々今も変わらぬ日本人を見る思いがする。

余談だが、本インパール作戦の中止についても、誰しものが止めるべきと思いつつもそれを言い出せずに無為な2ヵ月という時が流れ、死なずに済んだ命を失ってしまったのだ。似たような戦例は他にもある。面子に拘り過ぎる日本人ならでは、だろうか？

（了）